

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI

— 団原古墳・下黒田遺跡 —



1989.3

島根県教育委員会

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI

— 団原古墳・下黒田遺跡 —

1989.3

島根県教育委員会



団原古墳(横穴式石室)



団原古墳出土の子持壺

例　　言

1. 本書は昭和63年度に島根県教育委員会が、国庫補助金を得て実施した風土記の丘地内遺跡第6次発掘調査の報告である。調査は将来に予想される開発にそなえて遺跡の保護対策をたてるための基礎資料を得る目的で実施した。

2. 本年度は風土記の丘地内遺跡のうち、团原古墳（松江市山代町团原266）および下黒田遺跡（松江市大庭町44-2）の発掘調査を行った。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査指導者 山本清（島根県文化財保護審議会会長）、池田満雄（同委員）、渡辺貞幸（島根大学法文学部助教授）、蓮岡法暉（島根県文化財保護指導委員）、松村憲司（文化庁記念物課文化財調査官）

事務局 内藤仁男（文化課長）、井原謙（課長補佐）、勝部昭（同）、野村純一（文化係長）、宮沢明久（埋蔵文化財第一係長）、松本岩雄（同係文化財保護主事）、ト部吉博（埋蔵文化財第三係長）、田根裕美子（嘱託）

調査員 西尾克己（文化財保護主事）、鳥谷芳雄（主事）、原田昭一（同）

調査参加者 川見美智子、北垣澄子、柳浦正子、水野里江、三代俊子、角幸江、角ミチエ、長羅忠、梅原明枝、近重克幸、植松一枝、佐藤雄史、宮本正保

遺物整理 福島紀子、安達虎久枝、野中洋子、竹谷美古登、山根由利子、瀬田明子

調査協力 県立八雲立つ風土記の丘、松江市教育委員会、人庭公民館、長者原自治会、团原自治会、大庭小学校、名古屋城管理事務所、石井悠、勝部衛、北脇孝夫、桑原真治、昌子寛光、広江耕史、丹羽野裕、平野芳英

4. 発掘調査に際しては、吉野増男、今井福三、角吉郎の各氏をはじめ地元の方々には終始多くな協力を得た。

5. 团原古墳出土の石帶の石材鑑定は島根大学理学部大学院生西川和史氏に依頼し、下黒田遺跡出土の石器および石材については岡山大学文学部助教授稻田孝司氏・島根大学教育学部教授三浦清氏に助言をいただいた。

6. 掘図中の矢印（N）は、国土地理院による第3座標系X軸の方向を指す。したがって磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を示している。

7. 本書の図版中、図版10は、松江市教育委員会の、また、掘図中、第18図は出雲考古学研究会の提供によるものである。なお、本遺跡出土遺物および実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

8. 本書の執筆・編集は宮沢明久、西尾克己、鳥谷芳雄、原田昭一が行い、文責は目次に表記した。下黒田遺跡については、上記稻田孝司、三浦清、丹羽野裕、昌子寛光、勝部衛の各氏の御教示に負うところが大きい。記して深謝したい。

目 次

I 調査に至る経緯	(宮沢)	1
II 位置と環境	(〃)	2
III 調査		5
1. 団原古墳	(西尾・原田)	7
1) 調査の概要		7
2) 第1トレンチ		11
3) 第2トレンチ		13
4) 第3・4トレンチ		22
5) 小結		24
2. 下黒田遺跡	(鳥谷)	27
1) 調査区の設定と遺跡の概要		27
2) 調査区の層序と検出遺構		27
3) 出上遺物		31
4) まとめ		34

巻頭カラ--

図 版

I 調査に至る経緯

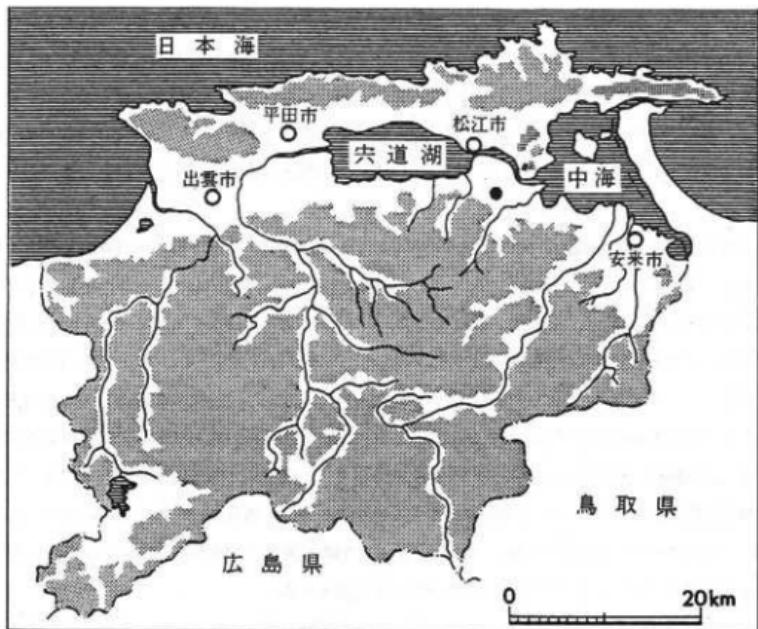
古代出雲文化に係る史跡その他の文化財を総合的に保存し、活用を図るため、昭和47年に県立八雲立つ風土記の丘を設置した。

以来、風土記の丘整備事業の一環として継続的に、風土記の丘地内の主要遺跡の発掘調査を実施してきた。

しかし、岡田山古墳出土大刀からの銘文発見や、荒神谷遺跡からの各種青銅器の出土など重要な発見が相次いだため昭和60・61年度は、これらへの対応のため調査を中断せざるを得なかった。

これらへの対応が一段落した昭和62年度には再び調査を実施することになり四王寺跡の第2次調査を行った。

本年度は、宅地化が予想される下黒田遺跡と团原古墳について、遺跡の実態等を把握するための調査を計画した。



第1図 両遺跡の位置(●印)

Ⅱ 位 置 と 環 境

下黒田遺跡は、島根県松江市大庭町下黒田に所在する遺跡で、標高20mほどの通称団原丘陵上に立地しており、国道432号線と県道竹矢・八重垣線が交差する大庭十字路交差点の東南、市営大庭第1住宅を中心に広がっている。

団原古墳は、下黒田遺跡の東方約500mの松江市山代町団原に所在する古墳で、意宇平野を一望する団原丘陵の東端に位置している。

意宇平野は、八束郡八雲村の天狗山に源を発する意宇川によって形成された沖積平野で、西の出雲平野、東の安来平野には及ばないものの、この地域では有数な穀倉地帯のひとつである。この平野の周辺には、縄文時代・弥生時代の遺跡も相当数知られているが、特に古墳時代中期・後期に造築された出雲地域のなかでも著名な古墳群が密集している。平野の奥まった一帯には大庭鶴塚古墳（方墳・一边約42m）、山代二子塚古墳（前方後方墳・復元全長約92m）、山代方墳（方墳・一边約45m）、永久宅裏古墳、東淵寺古墳（前方後円墳・復元全長約60m）、十王免横穴群、狐谷横穴群などがある。平野東縁には、円頭大刀に「額田部臣……」の銘文が発見され全国的に著名になった岡田山1号墳をはじめ、団原古墳、岩屋後古墳、御崎山古墳（前方後方墳・全長約40m）などが分布している。また、平野南側丘陵上には古天神古墳（前方後方墳・全長約27m）、東・西百塚山古墳群、安部谷古墳群があり、さらに北側丘陵上には廻田古墳、中竹矢古墳、上竹矢古墳群などが営まれている。

律令時代には、この平野の一角に国府が設置され、この地域が政治上重要な位置を占めたことが知られる。天平5年（733）に勅造された『出雲國風土記』によれば、このあたりに出雲国府をはじめ意宇郡家、意宇軍團、黒田駅、山代郷正倉などの公的施設が設置されていたという。また、「新造院」とされている私寺2か所も山代郷内にあったことが記されている。意宇郡家、意宇軍團、黒田駅などについては今のところ明確な遺構が検出されていないが、近年の発掘調査により出雲国府については六所神社周辺、山代郷正倉については大庭十字路付近が有力であるとの結論が得られている。山代郷内に所在する「新造院」2か所については、昭和59・62年に発掘調査を実施した四王寺跡と茶臼山北方に位置する来美庵寺をあてる説が最も多い。さらに、平野の北辺には天平13年（741）の国分寺造営の詔により建立された出雲國分寺跡・国分尼寺跡がある。このように、意宇川下流平野は律令時代になると名実ともに出雲の中心地となる。

以上、主要遺跡分布を概略記したように、意宇川下流平野一帯は古代出雲国を解明するに欠くことのできない重要な遺跡密集地であるといえる。



第2図 周辺の主要遺跡分布図 1:25,000

1. 団原古墳
2. 下黒田遺跡
3. 四王寺跡
4. 来美庵寺
5. 出雲國庁跡
6. 出雲國分寺跡
7. 出雲國分尼寺跡
8. 山代郷正倉跡
9. 大庭鶴塚
10. 山代二子塚
11. 山代方墳
12. 永久宅裏古墳
13. 狐谷横穴群
14. 十王免横穴群
15. 東瀬寺古墳
16. 黒田館跡
17. 小無田遺跡
18. 黒田畦土居遺跡
19. 岡田山古墳群
20. 岩屋後古墳
21. 御崎山古墳
22. 西百塚山古墳群
23. 東百塚山古墳群
24. 古天神古墳
25. 大草岩舟古墳
26. 安部谷古墳群
27. 畦田古墳
28. 平所遺跡
29. 上竹矢古墳群
30. オノ峠遺跡
31. 中竹矢遺跡
32. 國分寺瓦窯跡
33. 布田遺跡

3. 四王寺跡（松江市山代町師王寺他）

『出雲國風土記』所載の意宇郡山代郷の新造院の一つに比定されている寺院跡で、のちに出雲国造となった飯石郡の少領出雲臣弟山が造立したと考えられている。昭和59・62年の調査で建物跡や地山加工壙が検出され、寺院跡の可能性を裏付けた。

5. 出雲國庁跡（同 大草町）

六所神社付近にあり、昭和43～45年の調査により、8世紀を中心とする重なり合った官衙遺構が検出された。遺物は出雲國分寺・同國分寺と同型の瓦や、玉類の貢進を示す攻玉關係遺物、木簡などが出土している。

6. 出雲国分寺跡（同 竹矢町寺領）

昭和30・31年の石田茂作博士らの調査により金堂、講堂、僧房などの伽藍配置の大要が判明した。さらに45・46年の調査により南門、中門、金堂、講堂、僧房が一直線に配置され、塔は伽藍中枢部から離れて独立するという、金堂中心形の天平形式の伽藍配置であることが判明した。

8. 山代郷正倉跡（同 大庭町内屋敷他）

昭和53年からの3か年の調査により、掘立柱建物跡26棟、櫛列3条などが検出され、昭和55年12月国の史跡に指定された。規格性に富む倉庫群を中心とするもので『出雲國風土記』所載の山代郷正倉跡と考えられる。

9. 大庭鶏塚（同 大庭町茶臼）

一辺42m、総高10mの2段築成の方墳で、二つの造りだしを伴っている。内部構造、出土遺物等は不明である。

10. 山代二子塚（同 山代二子塚）

全長約90m、後方部幅56m、くびれ部幅33m、前方部先端の幅51m、後方部の高さ9m、前方部の高さ6.5mを測る。県内では最大規模の前方後方墳である。

19. 岡田山古墳群（同 大草町岡田）

7基からなる古墳群のうち1号墳は、全長約24mの3段築成の前方後方墳で、横穴式石室を主体部とし、内部に組合式石棺がある。出土品の銀錯銘銀装円頭大刀から「各田_ノ臣」（類田部臣）という銘文が発見され、部民制成立の時期や「臣」の姓の成立時期を究明するうえで貴重なものである。

20. 岩屋後古墳（同 大草町有）

水田の中にあるが、すでに墳形はほとんど削り取られ墳形は不明である。現状では東西約11m、南北約18mの不整形の墳丘の中に石棺式石室が露出している。現存するのは奥室のみで、幅3.3m、奥行2mの長方形である。人物埴輪が多数出土している。

21. 御崎山古墳（同 大草町御崎）

岩屋後古墳の南方200mの丘陵先端部に築かれた前方後方墳である。長さ約41m、後方部の幅約23m、前方部の幅約17m、高さは後方部約3m、前方部約2mを測る。内部構造は片袖形横穴式石室で、奥行3.6m、幅3m、高さ2.8mあり石棺が2基置いてある。大刀類、馬具類などが出土しているが、とくに獅噛環頭大刀が注目される。

26. 安部谷古墳群（同 大草町井手ノ上他）

5か所に數穴ずつの横穴群があると思われる。1号穴は複室構造で、前室奥行1.3m、幅2m、奥室奥行2m、幅2.8m、高さ1.3mある。前室の天井は四注式妻入家形で、奥室は平入家形に加工されている。1号穴から4号穴にはいずれも有縁石床状のものが設けられている。

III 調査

1. 団原古墳
2. 下黒田遺跡



1. 団 原 古 墳

1) 調査の概要

今年度の発掘調査は松江市山代町团原266の吉野増男氏所有の畠地を対象とした。团原古墳の大半が位置する畠地における発掘調査および現地測量調査に対して、了承が得られなかつたため、大正7年の梅原未治報告⁽¹⁾にみられる团原古墳の石棺式石室が開口する西南方向に位置する吉野氏所有の畠地において、古墳前面の様相を明らかにすることを目的として発掘調査に臨んだ。また、吉野氏所有の畠地には角礫凝灰岩からなる石室の天井石らしきものが放置されており、先の梅原報告⁽²⁾では、团原古墳の石棺式石室のはかに石室が存在する可能性も指摘していたため、同様にこの天井石の実態を明らかにすることも調査目的として考えた。

以上の目的を踏まえ、天井石の裏側に直交して $2 \times 10\text{m}$ の範囲に第1トレンチを設定した。また、石棺式石室が安置されていた台地頂部から約15m西南方向付近に第2トレンチ($8.5\text{m} \times 3\text{m}$)、第3トレンチ($2 \times 2\text{m}$)、第4トレンチ($1.5 \times 4.5\text{m}$)の3か所を設定した。

第1トレンチでは、天井石の下部には石室に関する石材およびその残片は全くみられず、また、天井石の下部の堆積土は周辺の耕作土と何ら変わりなく、この天井石は他から持ち運ばれたのち、現在地に放置されたことが明らかとなった。そのため天井石の周囲を掘り出し、実測作業を行ない、团原古墳の石棺式石室との関連性を考えるうえでの記録とした。なお、第1トレンチでは耕作土中より、石器・弥生土器・須恵器がわずかに出土している。

第3トレンチでは、地山が北側に向かって急激に立ち上がり、墳丘裾部の一部を検出できた。その墳裾を下りた地点でわずかであるが、須恵器片が出土している。

第3トレンチでは墳丘の南側ラインが東西に伸びることが確認されたため、この墳丘ラインが、どのように伸びていくかを確かめる必要が生じ、第3トレンチの西側に第2トレンチを設定して調査を進めた。当初は $2 \times 3\text{m}$ の範囲で掘り下げたが、墳裾と思われる地山の立ち上がりが確認されず、また、地山直上に須恵器片がかなりの広がりをもって出土したため、さらに東西に拡張し、最終的に第2トレンチの範囲を $8.5 \times 3\text{m}$ とした。東西に拡張することにより、トレンチ東側では地山が東側に向かって急激に立ちあがる状況が確認でき、第3トレンチで東西に伸びていた墳裾のラインがここまで南北に伸びることが明らかになった。また、墳丘裾部の前面において、子持壺・大甕・蓋杯などの須恵器の破片が地山直上に一面散布しており、第2トレンチの範囲で須恵器の広がりをおさえきれることはなかったが、作物が存在したので、第2トレンチをさらに拡張することはできなかつた。なお、耕作土中から石棺が出土したが、遺構に伴なうものではなく、今年度の発掘



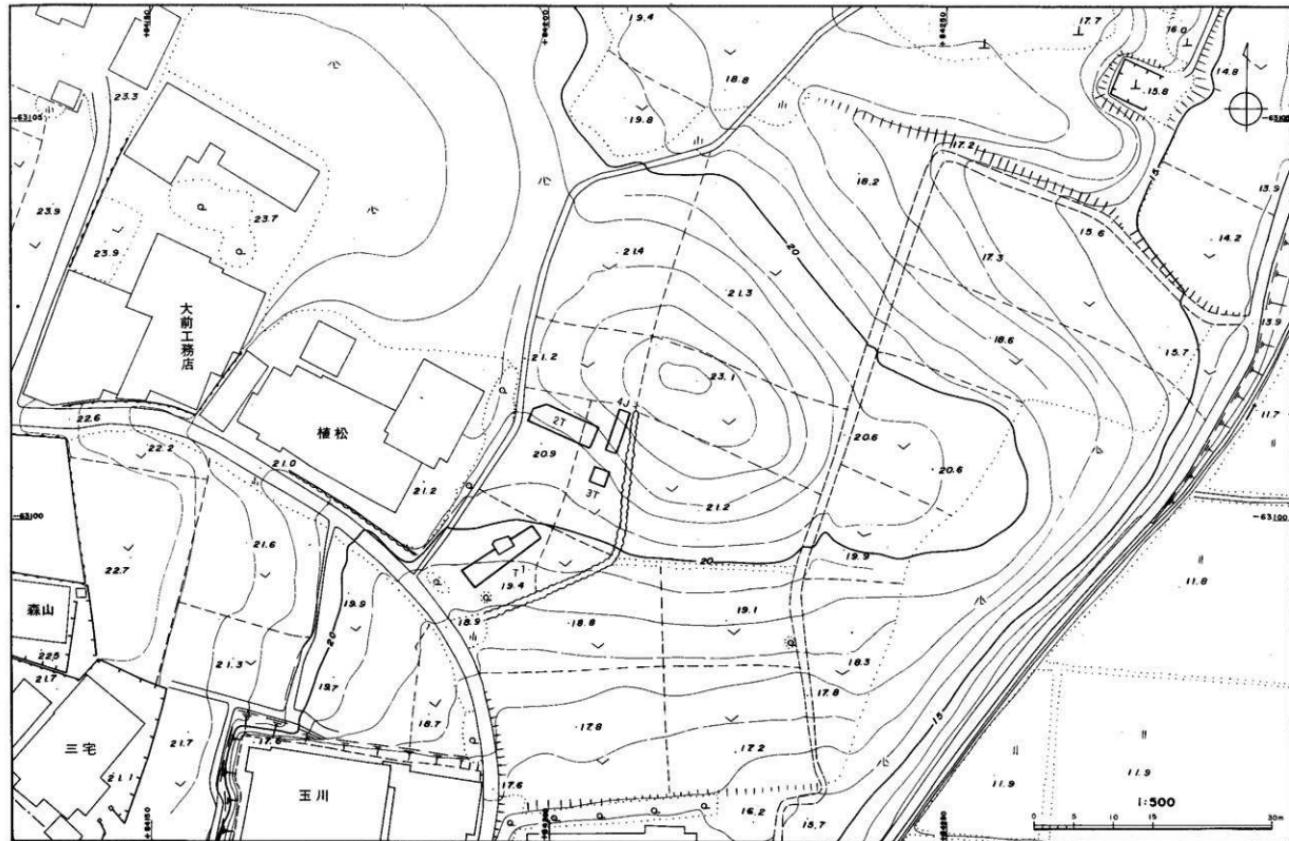
第3図 発掘調査区配置図

調査をみても奈良時代以降の遺物は極めて少ないと考えられ、当該地に石帶が使用されていた時期の遺跡が存在していた可能性は極めてうすいと考えられよう。

第4トレーニチでは、耕作土下30~40cmで地山に達し、第3トレーニチで検出した地山の立ち上がりラインの延長線上でゆるやかな傾斜をもちながら墳頂部にむかって延びていた。

また、今回の発掘調査に絡めて、愛知県名古屋市の名古屋城に移築された石棺式石室の実見および写真撮影、さらには石棺式石室が名古屋城内に移築されるに至った経過の聞き取り調査を行なった。

以下では、これらの各事項について詳細に述べてみたい。



第4図 団原古墳周辺地形図

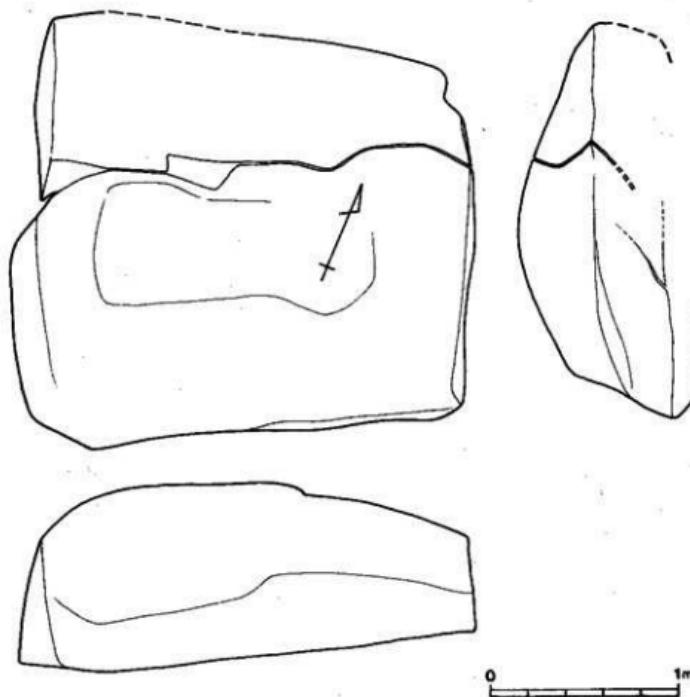
2) 第1トレンチ

遺構

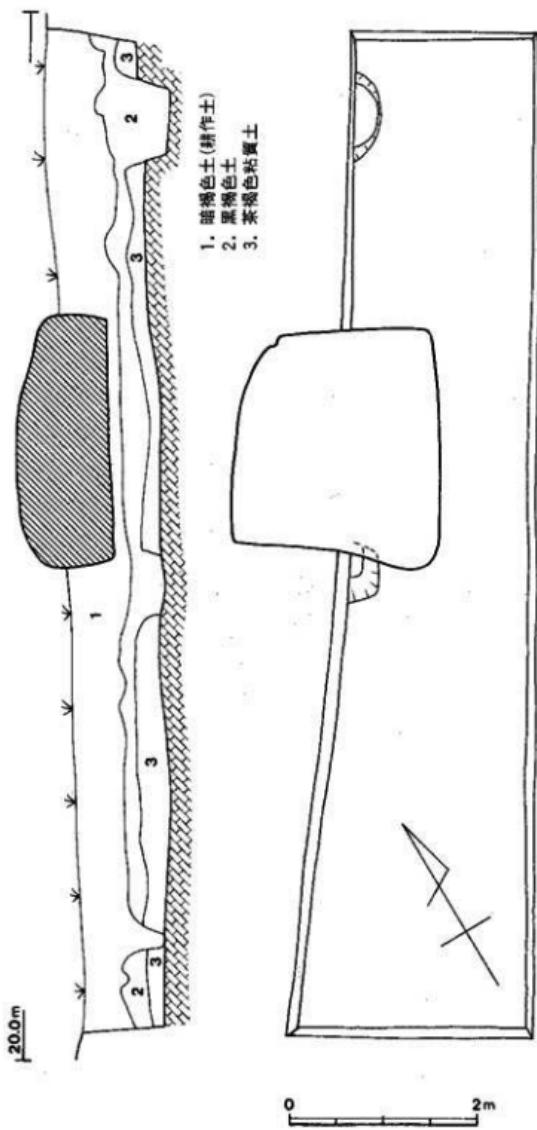
墳丘頂部より東南方向へ30m離れた畠地に、1辺2.2~2.3mで、高さ0.9mの凝灰岩質の切石が露出しており、その性格を知るためにトレンチをその石に沿って設定した。大きさは2×10mとし、地表から1mの深さまで掘り下げた。

層序は上からクロボクと呼ばれる厚さ40~50cmの耕作土、厚さ20cmの黒褐色土層、20~30cmの茶褐色土層となり、さらにその下に黄褐色粘質の地山が存在する。表土は耕作によりかなり乱れ正在るもの、下層にある2層はほぼ水平であり、安定している。

遺構としてはピットが2個検出されたのみである。この2個とも礫に接しており、一部しか掘れなかった。大きいピットは切石の東側2mに2分の1程度現われている。現状では径96cm以上で、深さ30mを測る大形のもので、内部に黒褐色土が入る。出土品はなく、時期不明。小さいピットは



第5図 第1トレンチ天井石実測図



第6図 第1トレンチ遺構実測図

切石の西側に接している。一部部分しか現われていないもの、一辺40cmの方形を呈し、深さは20cmを測る。内部には黒褐色土が入るが、出土品はない。両者とも性格は不明である。

切石は角礫凝灰岩であり、表面の風化が著しい。天井部はやや丸味を帯びているものの、頂部の60cm×150cmの範囲がやや平坦で、棟部と思われる。また、下部が幅50~70cmで垂直になり、本来は家形四柱に加工されていたものと考えられる。一方、底部は平坦となり、荒いノミ痕が多く残る。この石は形状から横穴式石室の天井石と推定される。なお、トレンチ内からはこれ以外の大きな石は発見されず、さらに、耕作上中に置かれることも考慮すると、後代に墳丘より現在地へ移動されたものと考えられる。

遺物

第1トレンチの遺物はすべて耕作土中より出土している。

第7図・1は須恵器大甕口縁部片である。外面には中央に3条の凹線文と、その上部には2条の櫛描波状文、下部には1条の櫛描波状分がそれぞれ施されている。その色調・焼成・調整から、おそらく第2トレンチ出土の須恵器大甕片（第14図・1、写真図版9・1）と同一固体であると思える。第7図・2は復元径7.5cmを測る弥生土器の底部片である。磨滅が著しいため、器面調整は不明である。このほかにも弥生土器と思われる土器片が数点出土しているが、いずれも磨滅が著しく、細片であったため、図化するまでには至らなかった。

3) 第2トレンチ

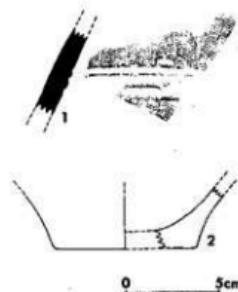
遺構

墳丘西側の墳裾を確認するために、墳頂部から20m西側にあるやや傾斜した畠地へ3×8mの範囲でトレンチを設定し、深さ1m程掘り下げることとした。

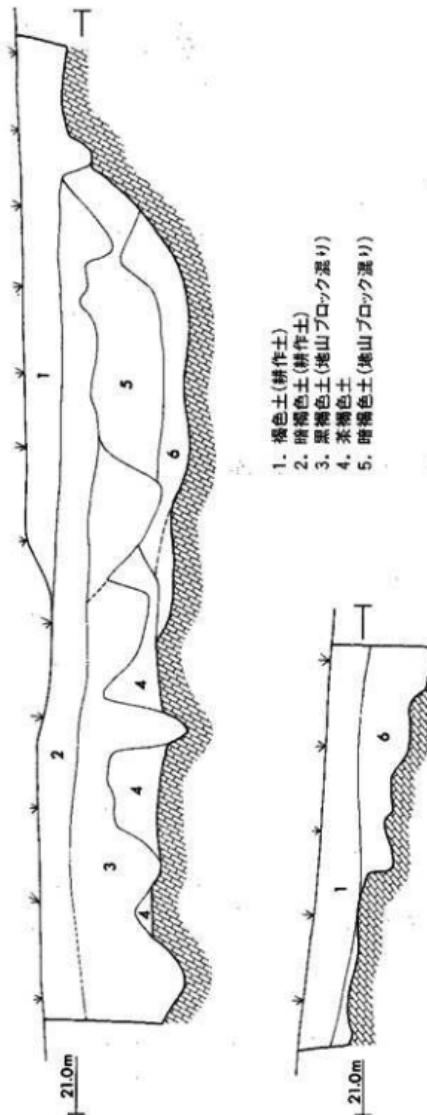
このトレンチの層序は、上から厚さ20~30cmの耕作土、厚さ20~70cmの地山ブロック混りの褐色土層、厚さ40cmの茶褐色土層となり、さらにその下層に黄褐色粘土質の地山が存在する。耕作土は褐~暗褐色土層で、2層に分かれる。東側のものは最近盛土したものである。次の黒褐色土層と茶褐色土層との境は不整合で、凹凸が著しい。これは、土地所有者によると、長芋の耕作時に掘り起して生じたものであるという。多くは1m以下の深さの落ち込みであり、地山まで達している。なお、黒褐色土層内に地山ブロックが混じるのはこのためと考えられる。一方、トレンチ東側にはクロボクと呼ばれる厚さ約40cmの暗褐色土層とその下に厚さ約20cmの地山ブロック混じりの暗褐色土層がある。前者は盛土が流入した層で、後者は古墳築造時か、それに近い時期に堆積したもので、多量の須恵器を伴う。地山面の多くは、ほぼ水平であるが、トレンチ東壁より西へ1.6mから急激に立ちあがる。この地点は、周囲の地形からみて墳丘の西側墳裾の一部に当たると思われる。この線はほぼ直線上で、南北方向に走ることより、墳形は方墳の可能性が強い。また、トレンチ北壁中央部西寄りでは地山面が20cm程高くなっている、この部分と墳丘との間は幅1.5mの溝状の凹地となっている。しかし、この高まりはトレンチ内では認められず、凹地は尾根の鞍部のみに存在すると推定される。

なお、トレンチ内には10~20cmの大小さまざまなピット状の落ち込みが検出された。深さはまちまちであり、底部は尖ったものが多い。この落ち込みは前述したように、耕作時に生じた穴と考えられる。このことは完形品に近い子持壺の付近では検出されなかつたことからも窺える。

トレンチ内からは須恵器が多量に発見されている。壺の破片はトレンチ内に一様に散布するが、



第7図 第1トレンチ出土遺物実測図



第8図 第2トレンチ北壁・東壁断面図

子持壺や蓋杯の破片は墳裾付近に集中している。以下、出土状況について記述する。

子持壺 (第10図・1) 墳裾近くの斜面において、口縁部を下にし、かつ、西向きに横転していた。親壺の口縁部から体部にかけては押し潰された状態で検出され、口縁部の破片と子壺の1個はその周囲から発見された。

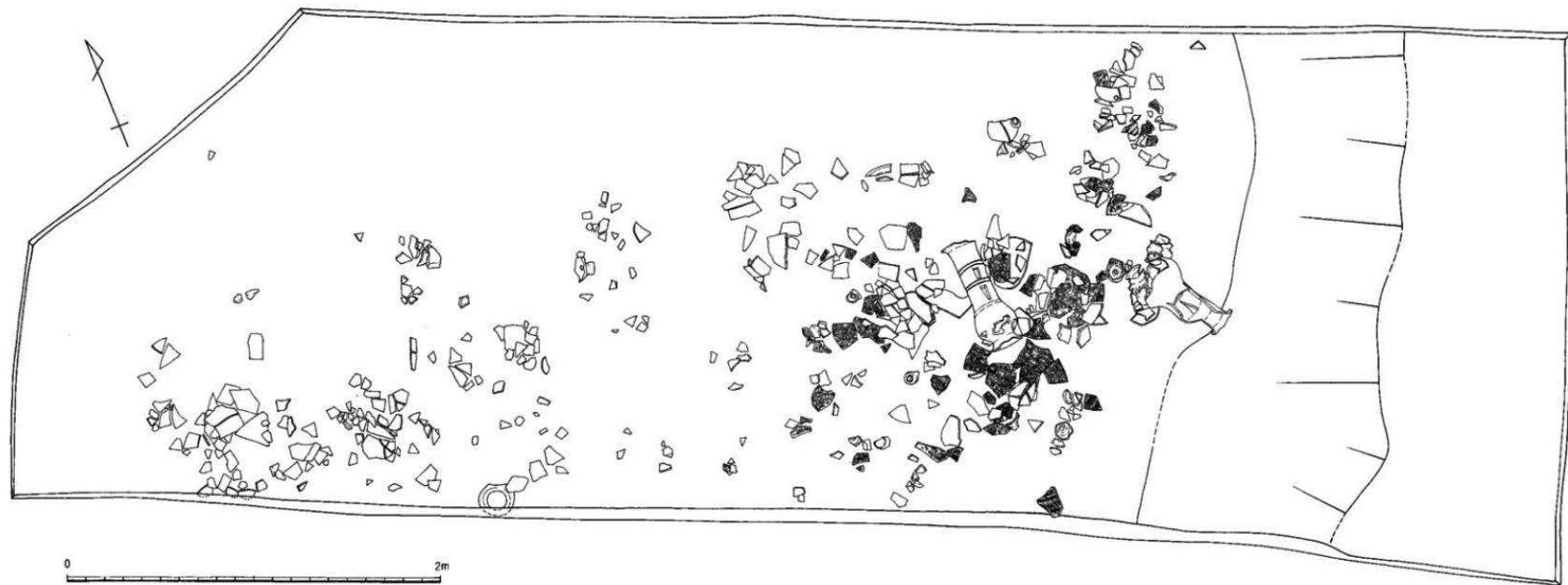
子持壺 (第10図・2) 子壺を欠く以外はほぼ完形であり、墳裾から約1m近くで、地山より僅かに浮いた状態で出土している。南北方向で、ほぼ水平になる。なお、子壺のうち1個のみが親壺付近で出土しているが、他はトレンチ内では発見されなかった。

子持壺 (第11図・1) 口縁部から脚部までの全容が知れるものであるが、多くは破片として発見された。これらの破片はトレンチ全域に散在していた。

子持壺 (第11図・2) 親壺の肩部以下の形が知られる。ほとんどが破片となっており、墳裾付近に集中している。

壺 (第14図・2) ほとんどが破片となって出土したが、ほぼ完形に近い状況に復元できた。これらの破片は墳裾西側にある完形に近い2個の子持壺の間より出土している。

壺 (第14図・4) 肩部より胸部にかけて遺存している。破片の多くはトレンチ中央より西寄りにかけて散布している。

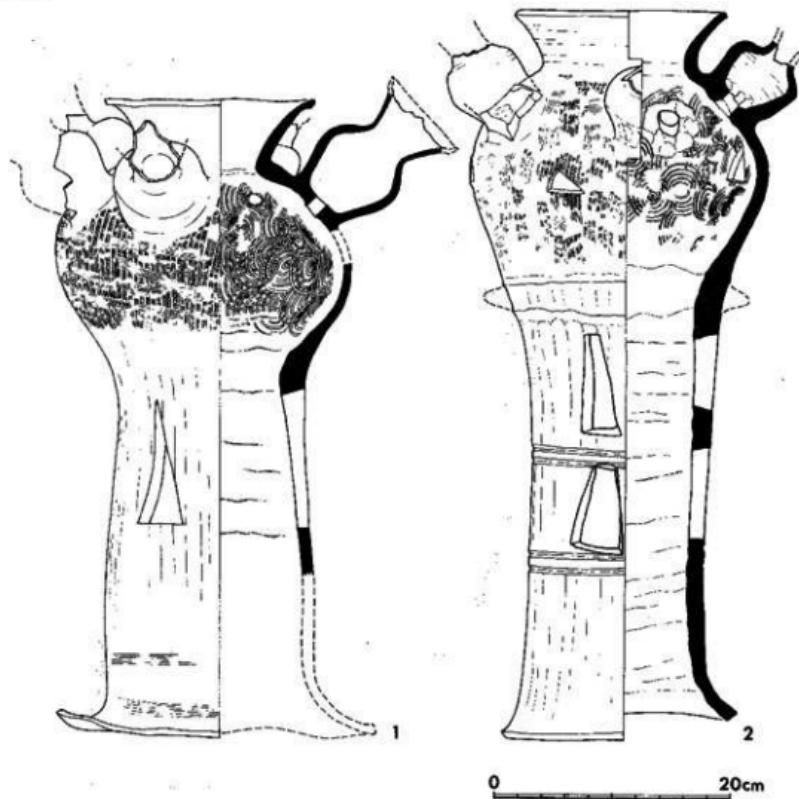


第9図 第2トレンチ遺物出土状況実測図

遺物

第2トレンチからは地山上面より約5~10cmのレベルにおいて集中的に遺物の出土がみられた。

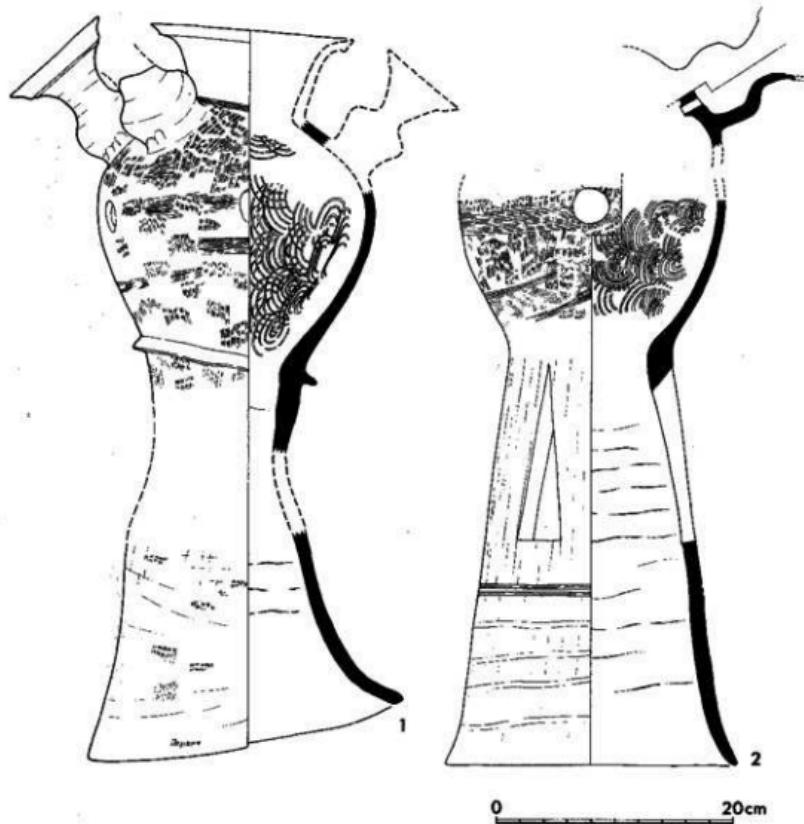
第10図・1(写真図版5・1)は須恵器子持壺である。器高は54.0cmを測るが、脚端部が著しく変形しているため、成形時は約58cm位あったものだろう。親壺には底がなく、円筒状の脚をもつが、脚端部が変形し、著しく外反している。親壺の外面には縦方向の平行タタキの上から横方向の回転ハケが施されており、内面には同心円文の当て具痕がみられる。この親壺の肩部には6個体の子壺がみられ、いずれも底部を棒状の工具で穿孔している。脚部には縦方向のケズリが施され、その下半には横方向のハケおよびナデがみられる。また、脚部上半には三角形の透孔が3か所に穿たれている。



第10図 第2トレンチ出土子持壺実測図(その1)

第10図・2（巻頭写真図版）は器高62.0cmを測る須恵器子持壺である。親壺には底がなく、円筒状の脚をもち、脚端部がやや外反する。親壺の外面には縦方向の平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕がみられる。その肩部には子壺が6個休みられ、それぞれの底部は穿孔されているが、接合前から穿孔されていたと思える。また、親壺の中央部には子壺の中間の位置にそれぞれ5か所の三角形の透孔が穿たれている。この親壺と脚部の境には貼り付け突帯の痕跡がみられるが、すべて剝離している。脚には縦方向のあらいナデが施されており、3等分する位置にそれぞれ2条の沈線が廻っている。この沈線を境にして上段と中段に長台形の透孔がそれぞれ3か所に穿たれている。

第11図・1（写真図版5・2）はかなり変形しているが、復元高62.0cmを測る須恵器の子持壺である。



第11図 第2トレンチ出土子持壺実測図(その2)

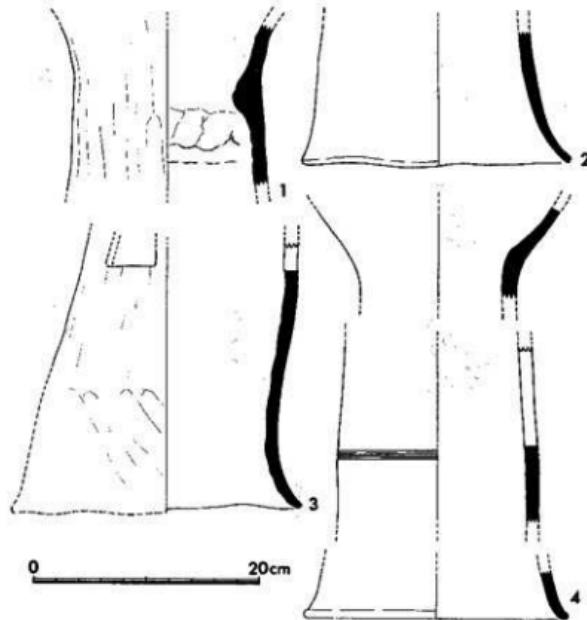
親壺には底がなく、裾広がりの脚をもっている。親壺の外面には縦方向の平行タタキの上から横方向の回転ハケが施されており、内面には同心円文の当て具痕が残っている。親壺の肩部には子壺が5個体みられ、最大径の部分には円形の透孔が4か所穿たれている。脚との境には貼り付け突帯がみられ、脚中央部には2条の沈線がひかれている。脚の調整は部分的に平行タタキの上から横ナデや縦方向のあらいナデ痕がみられ、沈線の上方には三角形の透孔が3か所に穿孔されていたと思われる。

第11図・2(写真図版5・3)は須恵器子持壺であるが、親壺上半部が残存しておらず、焼成・色調・調整などからみて同一個体と思われる子壺が2個体出土している。親壺の外面には縦方向の平行タタキの上から横方向の回転ハケが施されており、内面には同心円文の当て具痕がみられる。また、親壺の中央部には円形の透孔が穿たれているが、個数は明らかでない。残存している子壺は2個体とも底部を棒状工具で穿孔している。脚は裾広がりであり、中央部には2条の沈線が施されている。脚には縦方向のあらいナデが施されているが、この沈線を境にして、上方には三角形の透孔が3か所、下方には部分的に横方向のミガキが施されている。

第12図・1は須恵器子持壺の親壺から脚にかけての破片である。その色調・焼成・調整からみて同2・3いずれかと

同一個体であると思
える。親壺には底が
なく、脚外面には縦
方向のナデが施され
ている。また、その
下端には三角形の透
孔の一部がみられる。

第12図・3(写真
図版5・4)は変形
しているが、須恵器
子持壺の脚部片であ
る。脚中央部の外面
には縦方向のナデが
施され、下半部には
斜め方向のナデがみ
られる。脚上半部には
三角形あるいは長



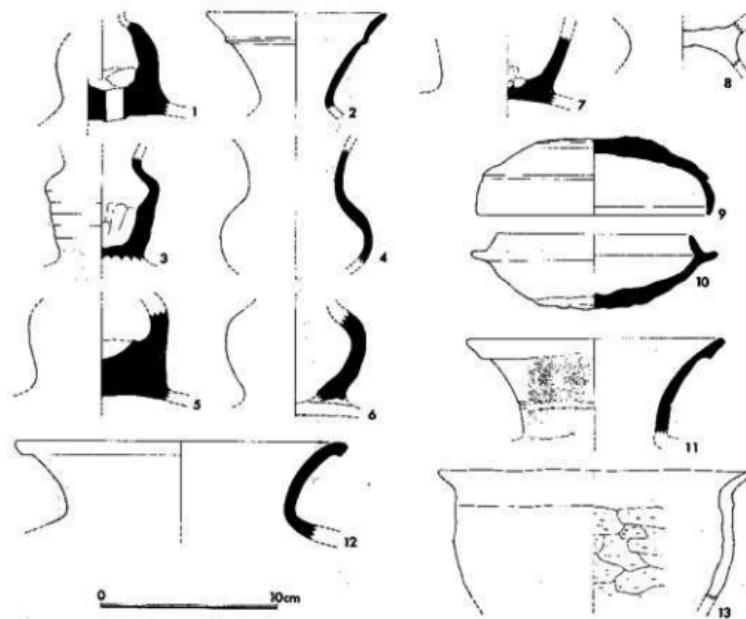
第12図 第2トレンチ出土子持壺実測図(その3)

台形の透孔が3か所穿たれている。

第12図・2(写真図版6・3)は須恵器子持壺の脚部片である。外面には縦方向のナデが施され、下端に近い部分には斜め方向のヘラケズリ、端部付近にはヨコナデがみられる。

第12図・4(写真図版6・4)は須恵器子持壺であるが、破片で出土しており、各部位ごとのみ接合できた。焼成は軟質で赤褐色～黄褐色を呈している。脚中央部には2本の沈線が施されており、その上方には長方形の透孔が穿たれている。脚外面には、横ナデおよびハケが、内面にも横ナデが施されている。

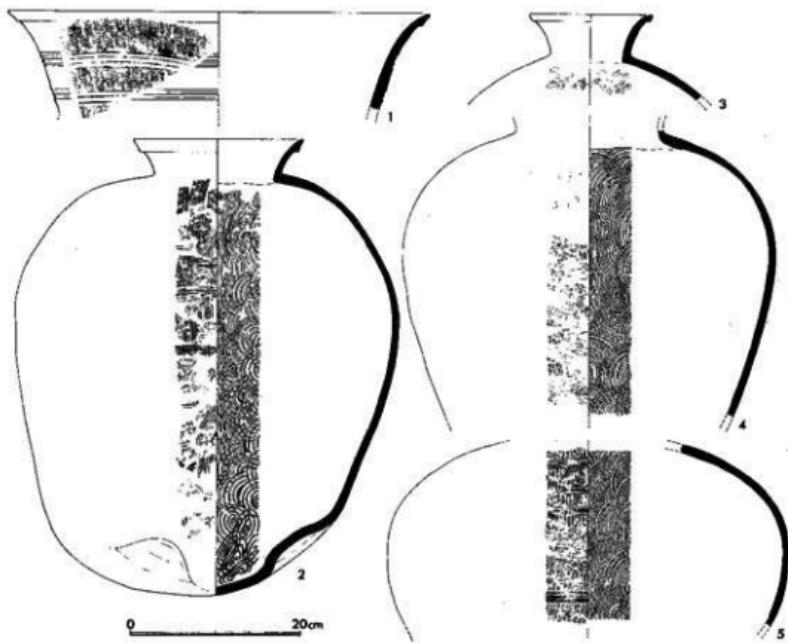
第13図・1～7は須恵器子持壺の子壺である。1(写真図版7・1)は第12図・4と同一個体の可能性があり、焼成不良である。底部は棒状工具で穿孔している。5(写真図版7・5)は底部に穿孔がみられず、先の丸い工具で強く押している。7(写真図版7・6)は底部が穿孔されておらず、棒状工具で底部を何度も押さえつけている。8は十師質模で底部から高台にかけて残存している。9(写真図版8・1)は杯蓋で口径13.0cmを測る。天井部には回転ヘラケズリが施されており、口縁部内面にはわずかであるが段がみられる。10(写真図版8・2)は受け部計14.0cmを測る杯身で



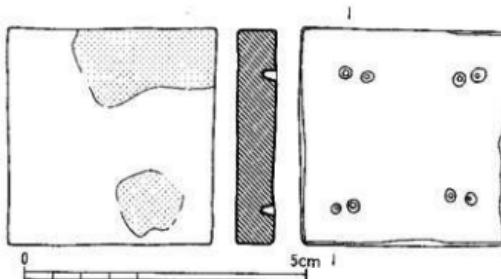
第13図 第2トレンチ出土土器実測図

ある。立ち上がりは内傾し、底部外面にはヘラ切りが施されている。11（写真図版8・4）は口径14.5cmを測る須恵器壺形土器口縁部で頸部の中央に1条の沈線、その上方に櫛描波状文が施されている。12（写真図版8・3）は口径19cmを測る須恵器壺形土器口縁部である。13（写真図版8・6）は土師質の壺形土器である。外面口縁部には強い横ナデが、また、体部にはナデが施されている。なお、外面には煤が付着している。内面には横方向のヘラケズリが施されている。

第14図・1（写真図版9・1）は口径50cmを測る須恵器壺形土器の口縁部片である。頸部下半に2条、上半に3条の凹線がそれぞれみられ、これらの凹線を境にして2条の櫛描波状文がそれぞれ施されている。なお、第1トレンチからも同一個体と思われる破片が出土しており（第7図・1）、八雲立つ風上記の丘資料館に保管されていた表採資料2点に関しては今回の整理作業において本資料と接合できた。第14図・2～5（写真図版9・2～5）は須恵器壺形土器である。いずれも外面には縦方向の平行タタキの上から横方向の回転ハケが施されており、内面には同心円文の当て具痕が見られる。なお、2の壺形土器の底部には焼成時に使用したと思える焼き台のくぼみが3か所認められる。



第14図 第2トレンチ出土土器実測図



第15図 第2トレンチ出土石蒂実測図
(トーン部分には研磨痕が残る)

第15図(写真図版9・6)は耕作土中より出土した石蒂である。縦3.9cm、横3.7cm、厚さ0.7cmを測る粗粒酸性火山岩を利用している。表面の大部分は剝離しているが部分的に研磨痕が残っており、その部分は黒色を呈している。なお、裏面の四隅には4か所のかがり孔がみられる。

4) 第3・4トレンチ

遺構

第2トレンチの南東側3mの斜面に2×2mの小さなトレンチを設定した。この層序は2層で、上層は厚さ95cmの耕作土、下層は厚さ20cmの茶褐色土層である。地山は北側に向かって急激に立ち上がり、墳丘斜面の一部と考えられる。

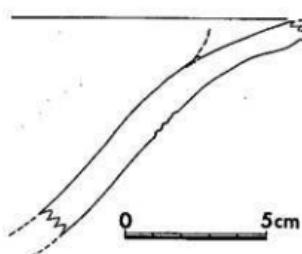
第3トレンチの北側2.5mに1.5×4.5mの細長い第4トレンチを設定した。ここは墳頂部の近くの斜面であり、厚さ25cmの褐色を呈する耕作土下は直ちに地山となる。地山は南に向かって緩かであるが、第3トレンチの北側40cmの部分より角度が急になり、傾斜変換点が認められる。

出土品としては第3トレンチ南端の褐色土層の状面より拳大の硃3個と子持器台の一部とみられる破片などが発見されている。この面は第2トレンチの暗褐色土層と対応すると推定され、古墳築造時の表土である可能性が強い。

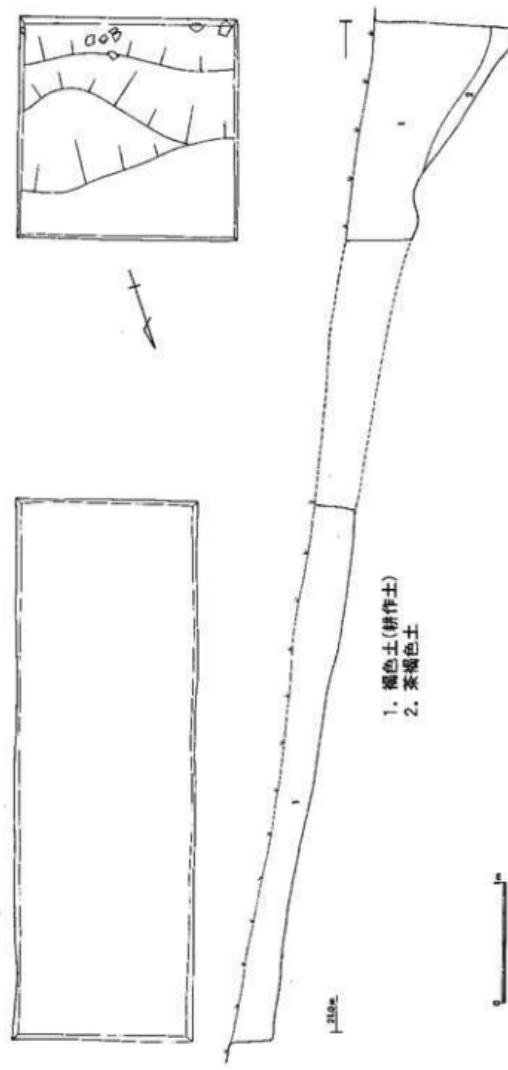
遺物

第3トレンチからは、第16図(写真図版9・7)の土器が出土している。淡茶褐色を呈しており、土師質とも軟質の須恵器ともとれる。口縁部外面中央部には3条の沈線が施され、内面には粘土の剝離した痕跡が見られる。おそらく子持器台の口縁部で、内面の剝離痕は子壺の接合部であろう。また、第3トレンチからは数点の須恵器片が出土している。

第4トレンチからは近・現代の陶磁器のほかには遺物の出土はみられない。



第16図 第3トレンチ出土土器実測図



第17図 第3・4 トレンチ平面図及び断面図

5) 小 結

団原古墳に関して、大正7年の梅原末治報告では、石棺式石室が西南方向に開口していたとされているが、地元の人によれば、一様に南方に開口していたという証言が得られる。今回の調査において、開口部の方向を明らかにするまでは至らなかったが、仮に西南方向に開口していたと想定した場合、第2・3トレンチは篠道入口付近にあたり、第3トレンチの東西に伸びる埴輪のラインが第2トレンチにみられるように北側にカーブして篠道部に続くという想定が成り立とう。また、南北に開口していたとした場合、第3トレンチで東西に伸びる埴輪のラインが第2トレンチで南北に延び、第2トレンチと第3トレンチの間に古墳の西南コーナーが存在することになる。石室の開口付近の違いにより、第2・3トレンチにみられたような地形の改変に対する解釈が異なってくるとともに、第2トレンチにみられる遺物をもとにした祭祀形態の評価にも異なりが生じてくる。

第2トレンチからは子持壺7個体以上、須恵器甕形土器6個以上が出土しており、古墳祭祀の一端を解明する良好な資料に恵まれた。ここにおいて出土遺物のはとんどが子持壺や甕形土器である点は興味深い事実であるうえ、なかでも完形3個体を含む7個体以上の子持壺が一度に出土したことは、出雲地方において類例がなく、刮目すべき成果であった。なお、これらの遺物群と同じレベルで出土した蓋杯・杯身は山本須恵器編年⁽²⁾のⅢ期末～Ⅳ期初頭に属するものであり、古墳に関する年代の指標となる資料になろう。

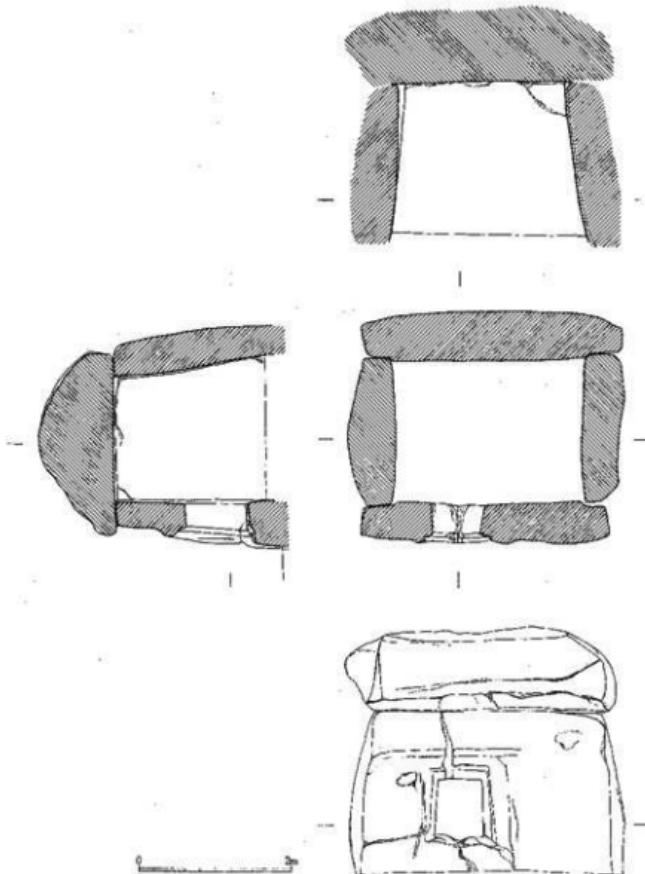
今後、新たに団原古墳の発掘調査が行なわれ、埴輪および篠道の様相が明らかになった場合、今回の調査において明確にしなかった第2・3トレンチが埴丘のどの地点にあたるか、あるいは遺物が埴丘のどの地点での祭祀に関わるものであるか、ひいては石室がどの方向に開口していたかなどの諸問題が確明されるであろう。

また、現在畠地に存在する犬井石に関して、名古屋城に移築された石棺式石室とは別の石室のものである可能性が梅原末治報告において指摘されていたが、第1トレンチの調査により、この天井石は畠の耕作土上に置かれており、他の石室が存在するという推測は否定される結果が得られた。そこで名古屋城内に移築された石棺式石室に目を転じると、玄門両脇篠道側壁をはめこむ浅い溝が掘られている。その溝間の幅、つまり篠道の幅は約90cmとなり、これに玄関側壁の板材約60cmと同じ厚さの板材を篠道側壁に使用した場合、側壁の端から端までの幅は2.1mとなる。現在、畠に見られる犬井石は2.2m×2.3mを測り、2.1mに近い数値を示している。そこで、団原古墳の付近にこのような角礫凝灰岩を石材として利用した石室の残存が全く認められない点からしても、この天井石は名古屋城内に移築された石棺式石室の篠道の天井石である可能性がきわめて高いと思える。

このほかにも、第2トレンチの耕作土中から石帶が1点出土していることは注目すべきことである。今年度調査区において奈良時代以降の遺構が検出されず、石帶の帰属時期が明らかにしない

ものの、意宇平野周辺の歴史を解明するうえで良好な資料が得られ、今回の発掘調査の目的の成果とは別に、思いがけない機会に恵まれたといえよう。

ところで、团原古墳の主体部である石棺式石室（第18図）は、現在、愛知県名古屋市の名古屋城内に置かれており、今回の発掘調査とともに名古屋城を訪れ、石棺式石室の写真撮影とこの石棺式石室が名古屋城内に移築されるに至った経緯の聞きとり調査を行なった。



第18図 団原古墳石室実測図

名古屋城管理事務所の説明によれば、その経緯は以下のとおりである。⁽⁴⁾

昭和11年、長谷川祐之氏の先代、長谷川鑑二郎氏が、⁽⁵⁾当時3万円で購入したが、輸送の方法がたたず、国鉄「馬渕」駅に半年ほど野ざらしで積まれていた。のちに国鉄の了承を得て、名古屋まで運んできた。

鑑二郎氏の話によると、馬渕駅の南方1里半ほどの崖から出土し、付近には既に天然記念物に指定された石室が4基あったが、購入したものは指定されてはいなかったようである。

名古屋駅からは牛車2台を仕立てて、八事の中村寛之助邸へ運び込み、組み立てずに積んであった。戦後、名古屋城に猿面茶席ができるときに森川勘一郎氏から名古屋城への寄附の依頼があり、昭和24年10月に寄附した。中村寛之助邸からは米軍のトラックで運んで、天守閣の北の空き地の中央に組み立てたが、奉行は勘一郎氏の子息、勇氏で一切を取りしきられた。まだ、その頃は猿面茶席は基礎工事中であり、のちに隣接する空き地に天守閣の礎石を置く時に現在地に移動させられたものである。

以上の如く、团原古墳の石棺式石室が名古屋城内に移築されるに至った経緯が明らかになったが、石棺式石室の床石がみられない点や、大正7年の梅原末治報告では前室の側壁がみられる点など、他にも石材が存在する可能性が残るが、その所在は明らかでない。ただ、名古屋城管理事務所の話によると、東海銀行寮からすべて運んだかどうかは明らかでないし、名古屋城に持ち込んだ際も点々とされており、他の石材が名古屋城に残されている可能性も残るようである。

註

- (1) 梅原末治「出雲に於ける特殊古墳（上）」（『考古学雑誌』第9巻第3号 1918年）
- (2) 山本 清『山陰古墳文化の研究』 1971年
- (3) 註(1)には義道の北西壁付近に「天井石一落ちて残れり」と別の義道天井石の存在を指摘しており、今回、調査の対象とした天井石を同様に義道の天井石としたなら、義道の天井石は複数存在していることになる。
- (4) 名古屋市北区大蔵町2番地在住の郷土史家水谷盛光氏が、寄贈者である名古屋市中区栄3丁目2-29在住の古美術商長谷川祐之氏より聞き取り調査を行ったものである。
- (5) 「長宜堂」経営。昭和63年8月死去。
- (6) 古美術商。昭和20年に52歳で死去。
- (7) 現在の東松江駅。
- (8) 現在の名古屋市瑞穂区陽明の東海銀行寮内の「暮雨庵」付近にあたる。
- (9) 昭和55年に93歳で死去。文部省文化財審議委員、愛知県文化財専門委員を歴任。昭和42・43年に名古屋市へ美術工芸品188点を寄贈し、森川コレクションと称される。

2. 下黒田遺跡

1) 調査区の設定と遺跡の概要

発掘調査地は、松江市大庭町44-2で、字名は内屋敷、土地所有者は今井福三氏である。当地は、国道342号線と県道八重垣・竹矢線が交差する通称大庭十字路に近く、周囲を市営大庭住宅や一般住宅に囲まれた畠地で、標高は約21.5mを測る。調査は、土地の状況に合わせて任意の座標軸を設けて実施し、これによって遺構の検出および遺物の取り上げを行ったが、同時に基準点測量を行い、国土調査法による第Ⅲ座標系における位置を確認した（第19図）。調査の方針は、遺構の遺存状況の把握とその性格の一端を知ることにし、検出した遺構は必ずしも完掘しないこととした。

下黒田遺跡は、松江市大庭町字下黒田に所在し、1986年の市営大庭第一住宅建設工事に伴う事前調査（以下、86松江市調査という）によって確認されたものである（島根県遺跡地図番号D-16）。この調査では、原始・古代から中、近世に至る多くの遺構・遺物が発見されたが、なかでも注目されたのは規格性に富む大規模な掘立柱建物跡群と大溝遺構が確認されたことであった。それらは、この遺跡の北、約100mのところに位置する史跡出雲国山代郷正倉跡との関連で極めて注意されており、一連の古代官衙跡としての性格が考えられている。今回の調査地点は、その際検出された大溝遺構陸橋部のほぼ真北、10数mのところに当たっていた。調査面積は、当初約200m²を予定したが、諸般の事情により結果はその半分の103m²で終了した。

2) 調査区の層序と

検出遺構

調査区は、南側が僅かに低くなっているが、ほぼ平坦な



	(x , y)	(X , Y)
No.1	(20, 12)	(-62932.35m, 83867.78m)
No.2	(20, 5)	(-62925.49m, 83866.48m)
No.3	(20, 0)	(-62920.57m, 83865.56m)

任意のy軸の方向は、第Ⅲ座標系X(N)軸に対して
10°38'西に偏っている。

第19図 調査区設定図

畑地で、全面に亘って①黒褐色の耕作土で覆われていた。その下位の層序は、基本的に、②準耕作土と考えられる淡黒褐色土層、③やや粘性のある茶褐色土層（調査終了間際の土壤分析時には、これをさらに2層に分けた。）となっており、これより下は、一部の試掘によると、④、⑤に比べて粘性が少なく黄斑状を呈した黄褐色土層、⑥粘性を増した黄色土層の順となっていた。そのほかで注意されたのは、調査区の北東部のみに②と③の間に⑦黒色土層が確認された。また、調査区の南側は、近年に掘削を受けたらしく、層序に相当の乱れを生じていた。遺構検出面は、おおむね③層であったが、セクションを観察すると、②層中にも柱穴を思わせるような落ち込みが見られ、あるいはこの層にも後述する遺構以外のものが存在した可能性が考えられる。

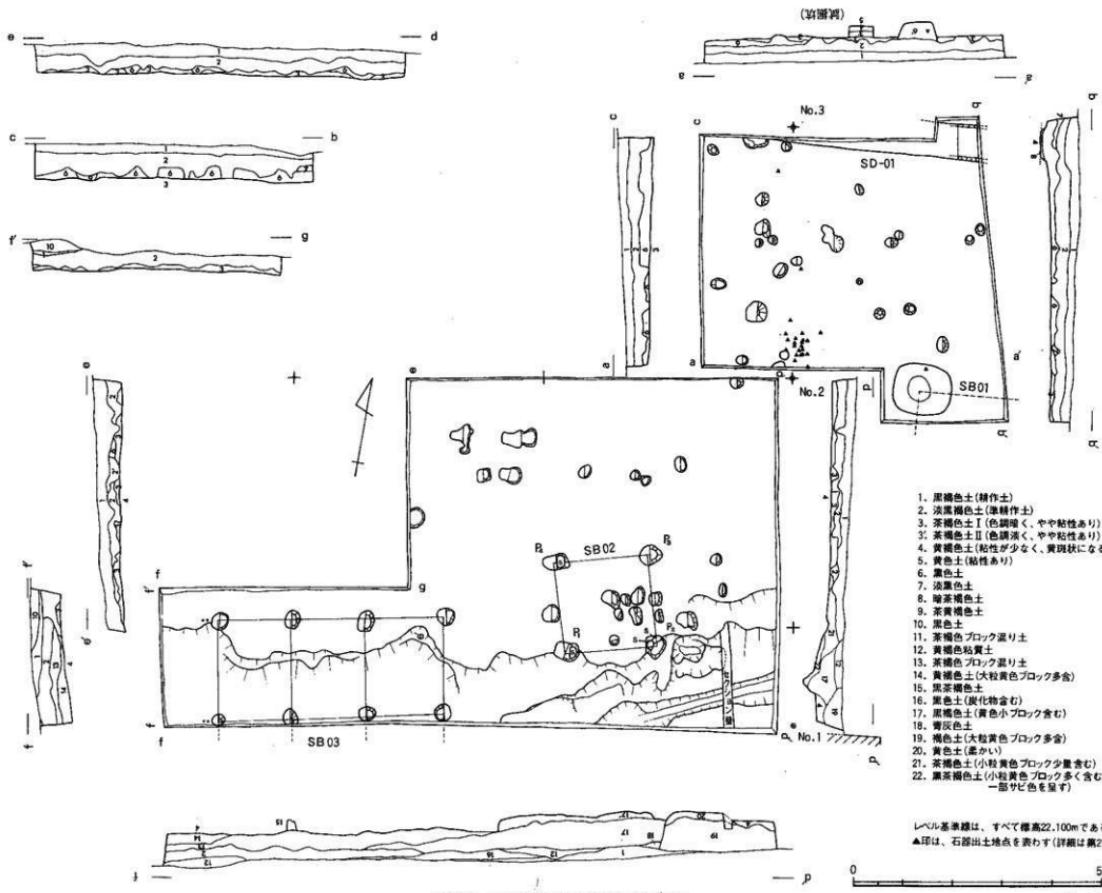
今回、発掘調査区域内で検出した遺構は、掘立柱建物跡3、溝状遺構1、柱穴の可能性がある小ピット約30である（第20図）。

SB01 調査区の東端で確認した遺構で、長辺116cm、短辺101cmを測る隅丸長方形を呈した柱穴の掘り形である。中央には、径45cm程の、柱の抜き取り痕が明瞭に認められた。x-20ラインのセクション（北端）を観察中に掘り下げたところでは、その深さは39cmであった。僅か一穴の検出ではあるが、調査範囲の状況からすると、掘立柱建物跡の北西隅の柱穴であることが分かり、この建物跡の桁行なり梁間はこれより南および東方向にあることが明らかである。また、これより東側に向かっては心心から170cm掘り下げても次の柱穴掘り方が現れなかつたことから、この建物跡の柱間は少なくとも220cm以上はあるものと見られ、このような柱間寸法は86松江市調査のSB05（2.96m）、あるいは正倉跡SB13（2.82m）に近いものがある。また、これが国土座標系における位置は、X-62925.27、Y83868.98であり、86松江市調査のSB01とSB02の西側側柱を結ぶラインのはば延長線上にあることが注意される。因に、前記SB01、02、05は同じ主軸方位を示す建物跡である。

SB02 調査区の中央やや南寄りで検出した1間四方（柱間寸法1.85m）の建物遺構と考えられるもので、南北を基準にすると主軸方位はN-16°-Wを測る。柱穴は不整形の円形で、深さは平均26cmを測り、P₂以外は礫石を伴っていることが注意される。遺物は出土していない。

SB03 調査区の西南隅で確認した掘立柱建物跡で、東西3間分（4.55m）、南北1間分（1.88~2.00m）を検出したが、西または南に向かっては柱間が加わる可能性がある。柱間寸法は、東西間は1.50mと等間隔であるが、南北間は西側に向かって僅かに広がる傾向がある。東西北辺の柱間を基準にすると、主軸方位はW-11°-Sである。柱穴からは遺物は出土していないが、この地点の耕作上中から土師質土器片2点を検出していること、およびその方位などから、中、近世の建物遺構と考えられる。

SD01 調査区の北東端で検出した溝状遺構で、確認したのは長さ約6mほどの範囲である。東西方向に走り、およそW-5°-Sの向きにあって僅かに南に振れている。サブトレンチの結果では、



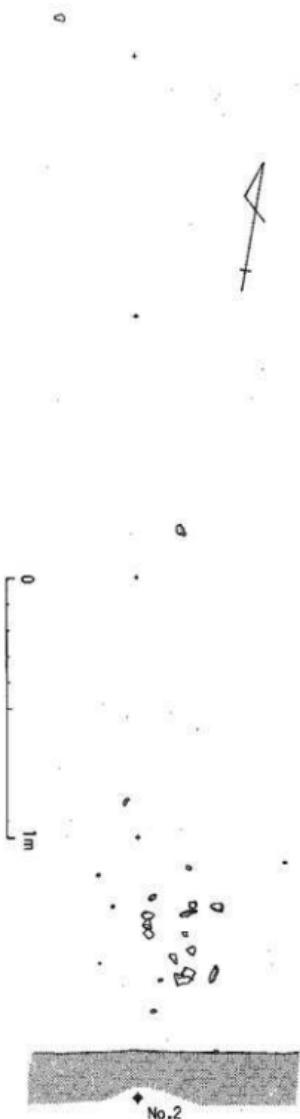
第20図 調査区検出構造案測図 (1/80)

上端幅71cm、下端幅60cm、深さ13cmあまりのものである。遺物は出土していないが、この遺構の方位をみると、86松江市調査のSD01・02と、約24.5mの距離をおいてほぼ平行関係にあると言ってよく、両者の関連性が注目される。

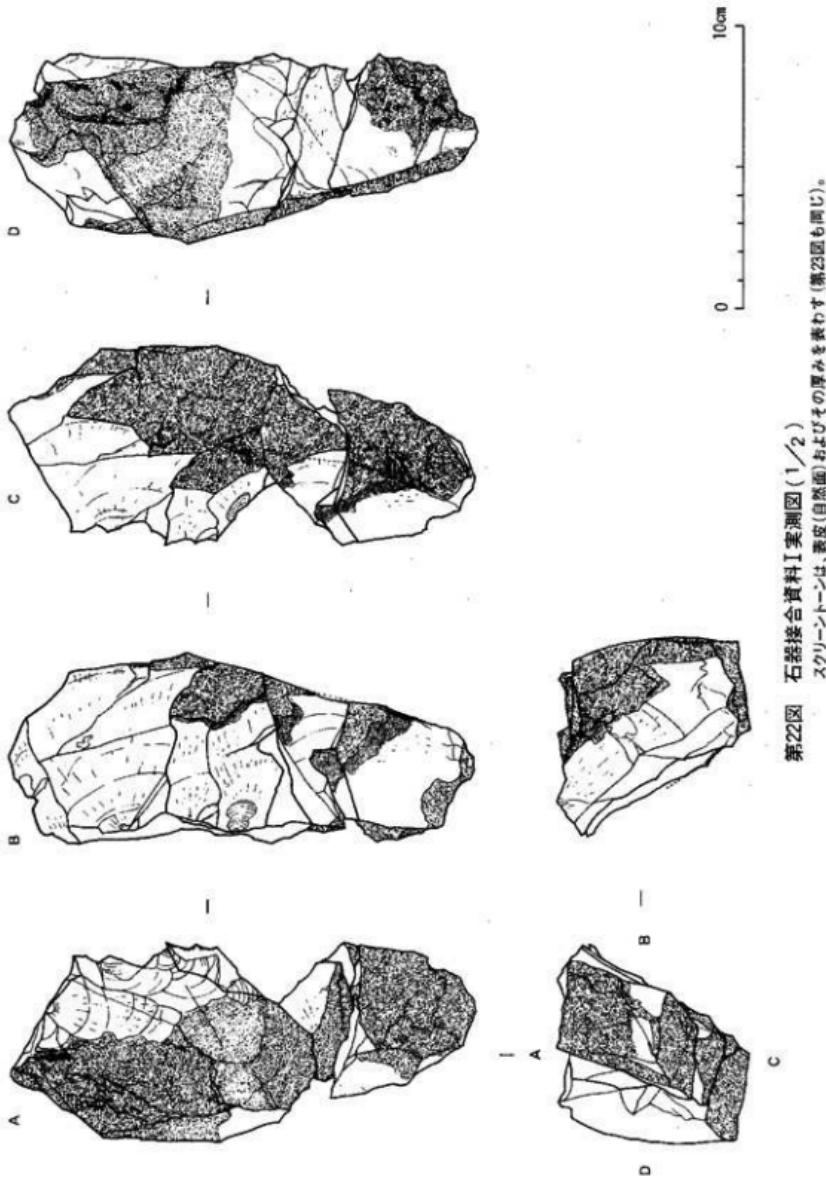
3) 出土遺物

本調査で出土した遺物には、石器、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器、金属製品などがある（第22～24図）。

石器 調査区の北東部で検出した石核および剝片からなる資料で、その数は大小あわせて約40点である。そのうち25点は、③層の上位において第21図のように取り上げることができた（他の大半は、ほぼ同一地点の②層中から検出した）。また、これまでの整理では、これらから4組の接合関係を知ることができた。資料Iを例にとると、この石器の製作過程は、原石の表皮（自然面）が剥ぎ取られたあと、剝片の剥離がほぼ同一方向（第22図A面）から縦長状に連続的に行われていることが分かる。ただし、このように明らかに意図的な剥離ではあるが、剝片の中には石器の成品と見られるものはない。また、少なくとも資料Iの剝片は、この石材に固有の不規則に走る節理のためか、綺麗な剥離面を示しているとは言えず、肉厚も一定せず、大割りな感さえすることから、果してこの原石から目的とする剝片がその意に添うように剥離したかどうか、また最終的にうまくそのものが生産されたかどうか、はっきりしないところがある。石器となった石材は、主に茶褐色を呈した玉髓質のもので、中には比較的透明度が高く瑪瑙質に近いものがある。このような色調や自然面の残り具合などからすると、ここには少なくともないしは5個の原石とされた玉髓塊が存在したものと思われる。地質学上、玉髓・瑪瑙は主に玉湯町から八雲村一帯にかけて広く分布する第3紀大森

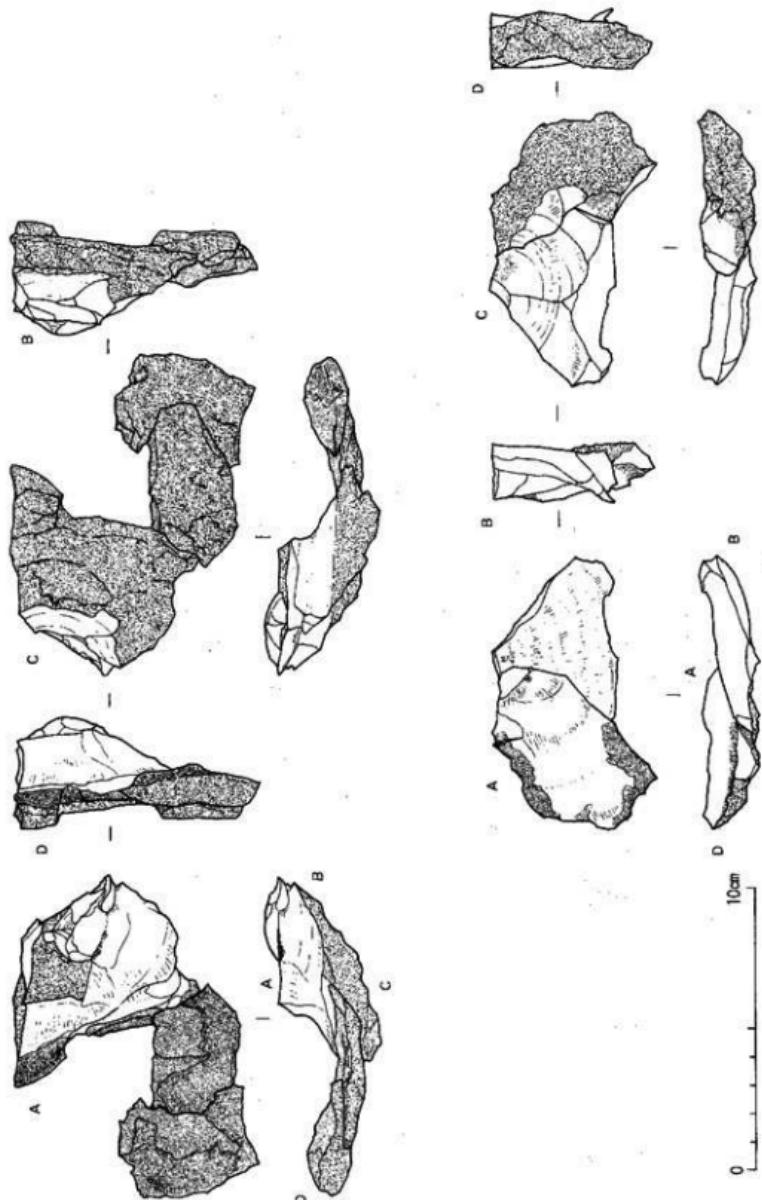


第21図 石器出土状況図



第22図 石器接合資料I実測図 (1/2)
スクリーンーンは、表皮(自然面)およびその厚みを表わす(図23回も同じ)。

第23図 石器複合資料II、III実測図(1/2)



累層中から産出するものとされることから、この玉髓は产地から当地に人为的に運び込まれて来て、石器製作に用いられたものと考えるのが妥当である。また、玉髓・瑪瑙は、いわゆる工作りの原材料として注意される石質のものであるが、その製作過程で生ずる剝片とは質・量ともに異なるものであることなどを考え合わせると、これらの一括出土遺物は旧石器である可能性が極めて高い。

弥生土器 SD01の直上に近い黒色土層から出土したもので、小片だが、口縁部が短く「く」の字に屈曲し、端部には複合口縁化がみられる。焼成は良好で、淡赤褐色を呈し、内面頸部以下にケズリが認められ（第24図4）、弥生時代後期のものと考えられる。大庭・山代台地での弥生土器の検出は、81年県が調査した黒田畦十居第Ⅲ調査区出土の、堅穴式住居跡に伴う後期の高杯形土器に次ぐものであり、今後この時代の遺構・遺物についても十分に注意される必要がある。

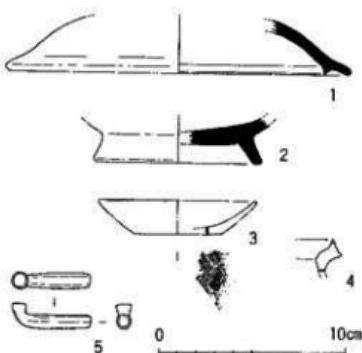
須恵器 1は、調査区北東部の黒色土層から出土した蓋の破片である。復元径18.3cmを測り、調整は回転ナデのみ確認できる。焼成は良好で、青灰色を呈する。内面に返りのつくりもので、頂部には宝珠または輪状つまみがつくものと見られる（同図1）。出雲国庁須恵器編年第1形式^①に比定できる。2は、高台付きの杯の底部破片で、底径9.0cmを測り、淡青灰色を呈し、焼成がやや甘い。高台は「ハ」の字状に開く（同図2）。おおむね1と同じころのものではないかと思われる。

土師質土器 SB03付近の耕作土中から出土した皿形土器の破片で、ロクロ成形でつくられ、底部に回転糸切り痕が認められる。焼成は良好で肌色を呈す（同図3）。中・近世のものと考えられる。

金属製品 調査区北東側の淡黒褐色土中から出土した長さ4.2cm、高さ1.8cm、基部径0.7cmを測るキセルの雁首部である。先端部は断面円形であるが、軸部は六角形状になっている点が特徴である（同図5）。近世のものかと思われる。

4) まとめ

今回の発掘調査は、調査面積が極めて限られているため充分なことは言えないが、およそ次の二つの点で大きな成果があったと言える。一つは、僅か一穴ではあるが、相当規模を有する掘立柱建物跡の柱穴痕（SB01）が検出されたこと。これは、周囲で確認されている古代官衙跡のそれとの類似性が極めて強く、史跡出雲国山代郡正倉跡および86松江市調査分の掘立柱建物跡群との関連性が注目される。とりわけ、その位置が両者を南北に大きく画すとみられる大溝遺構の北側、それも市SB01・02の建物跡の西側側柱ラインのはば延長線上に確認出来た



第24図 その他の出土遺物実測図

ことは、この建物跡が大溝の北側に位置しながら南側の建物跡との規則的な配置が示唆されるものであり、両者が大溝遺構によって単純に区分されるというよりも、むしろ両者はあるいは性格を異にしながらも互いに企画性をもちながら計画的に配置された可能性があるものとして今後十分に検討される必要があろう。この一連の古代官衙跡の実態と性格を究明するために、今後さらにこの地区の調査が計画的で、かつ継続的に進められなければならないと考えられる。

いま一つは、旧石器と考えられる石器の出土であるが、これについては詳細な検討を加えた上で調査時に行った出土地点の土壤分析の結果報告とも併せて改めて報告することとし、およそ今の時点で言い得る本資料の発見の意義とこれをめぐる幾つかの課題を記してこの概報のまとめとしたい。

出土した石器は、硬質の玉髓を用いた旧石器である可能性が極めて高く、しかも接合資料を含みつつ、その出土状態が把握できたという点において、その製作技法や石器プロックなどを知るうえで極めて注目すべき考古資料を得たと言える。このような例は島根県では初めてである。

出雲地方の旧石器時代研究はこれまで、1970年代のはじめごろに当地方にも同時代文化が存在したとして走りが見えたかにみられたが、その非科学性ゆえに地質学および考古学の両面から厳しく批判され^{註(1)}、その後は新たな進展をみることなく今日に至っている。その主な理由の一つは、明確に旧石器と呼ぶべきものがこれまでに発見されていないことによるものであるが、真に科学的にその存在の可能性について言及しようとしたものは、僅かに一論考に過ぎなかったと言ってよく、そうした意味においても本資料が今後この分野の学術研究に与える影響は大きなものがあると言えよう。

ところで、今日この地方においても各種の開発事業に伴って発掘調査が数多く行われているが、結果として旧石器の可能性が極めて高いと考えられる石器が、近時僅かずつはあるが知られるようになってきている。松江市古曾志町の古曾志平廻田遺跡、同市上乃木町の矢の原遺跡、同市大庭町の下黒田遺跡（86松江市調査）などの出土遺物がそれであるが、特に後者二遺跡の立地に注目すると、山代・大庭から乃木にかけてひろがるいわゆる乃木段丘^{註(2)}にあることが注意され、しかもその石材は玉髓であることがあわせて注意される。とりわけ下黒田遺跡は、松江市およびこのたびの二度の調査によって、ある広がりをもつ遺跡であることが強く示唆されるものである。このことからすると、大庭・山代・乃木の台地上は、今後旧石器時代遺物の包含地域として、つまりは同時代人の生活の舞台であった可能性の極めて高いところとして十分に注意される必要があろう。

こうしてみると、大庭・山代の台地は、從来主に知られているような古墳・奈良時代の遺跡ばかりではなく、およそすべての時代の人々の生活の痕が刻まれたところとして改めて注目される。しかしながら、このことと同時にこうした重層的な遺跡の調査は、遺構・遺物を包含する地層が浅いこともあって、その検出が時代が下るに従って容易でないことも指摘できよう。この困難を克服するためには、地域の理解と協力を得ながら目的的で組織的な調査を継続的に行うことが何より望

まれる。それは当地域のトータルな歴史像を描くうえで必要不可欠な作業であるばかりでなく、近時この辺り一帯が各種開発によって急激に変貌しつつあることを考えると、いま緊急に取り組むべき重要な課題であると考えられる。

最後に、この下黒田遺跡周辺は從来から歴史的な遺産が豊富に眠るところとして知られ、^⑨私達が風土記の丘地内と呼ぶ地域の一部であり、近年とみにその計画的な調査が強く求められている箇所である。^⑩県立八雲立つ風土記の丘資料館は、この地内に上記の点を目的の一つとして1972年に設立されたが、^⑪今日ではその機能が十分に發揮されていないと言ってよい。このことは既に指摘されて^⑫いるところでもあり、この発見を機に改めて見直したいものである。風土記の丘資料館は、地域と共に歩む博物館として再出発しなければならない時期に来ていると言える。

註

- (1) このことは図面を示して言及すべきものであるが、ここでは主に松江市教委撮影の航空写真などから検討している。なお、文献⑬は山代郷正倉跡と下黒田遺跡の位置関係をえた勞作であるが、本文及び図中の方位の表記等に誤りがあると教えられた。担当者昌子寛光氏の真摯な態度に感謝したい。
- (2) 文献⑭に研究史が簡潔にまとめられている。
- (3) 古曾志平廻田遺跡は87年県調査、未公表。丹羽野裕氏の教示による。矢の原遺跡は88年松江市調査、未公表。昌子寛光氏の教示による。下黒田遺跡は、その出土遺物が文献⑮に一部公表されている。昌子氏の教示による。
- (4) 文献⑯は、タイトルが示すように主に同資料館の収蔵展示について問題点を明らかにしその改善案を提示したものであるが、なかで「資料館設立時の趣旨に比し、現実の収蔵展示活動は十分ではない」との指摘がある。充実した収蔵展示活動は、不断の「資料の調査・研究・蒐集」によるることは論をまたないであろう。

参考文献

- ① 松江市教育委員会『出雲国跡発掘調査概報』1971年
- ② 小野忠照「出雲の瑪瑙製旧石器」(『考古学ジャーナル』58号) 1971年
- ③ 空山遺跡調査団・八雲村教育委員会『空山遺跡』1972年
- ④ 島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘設置事業報告』1973年
- ⑤ 島根県『土地分類基本調査 松江』1974年
- ⑥ 島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年
- ⑦ 稲田孝司「出雲系『前期旧石器』について」(『考古学研究』84号) 1975年
- ⑧ 島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981年
- ⑨ 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅰ』1982年
- ⑩ 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅱ』1983年
- ⑪ 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅲ』1984年
- ⑫ 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ』1985年
- ⑬ 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅴ』1986年
- ⑭ 島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘資料館収蔵展示施設整備計画報告書』1986年
- ⑮ 島根県教育委員会『史跡山雲国山代郷正倉跡環境整備報告書』1988年
- ⑯ 松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』1988年

図版



団原古墳近景(東方から)



第1トレンチ完掘状況(南西方から)

図版 2



第1 トレンチ石室天井石検出状況(北西方から)



第2 トレンチ遺物検出状況(西方から)



第2トレンチ子持壺出土状況(南方から)



第2トレンチ子持壺出土状況(南方から)



第3 トレンチ完掘状況(北西方から)



第4 トレンチ完掘状況(南方から)



1



2

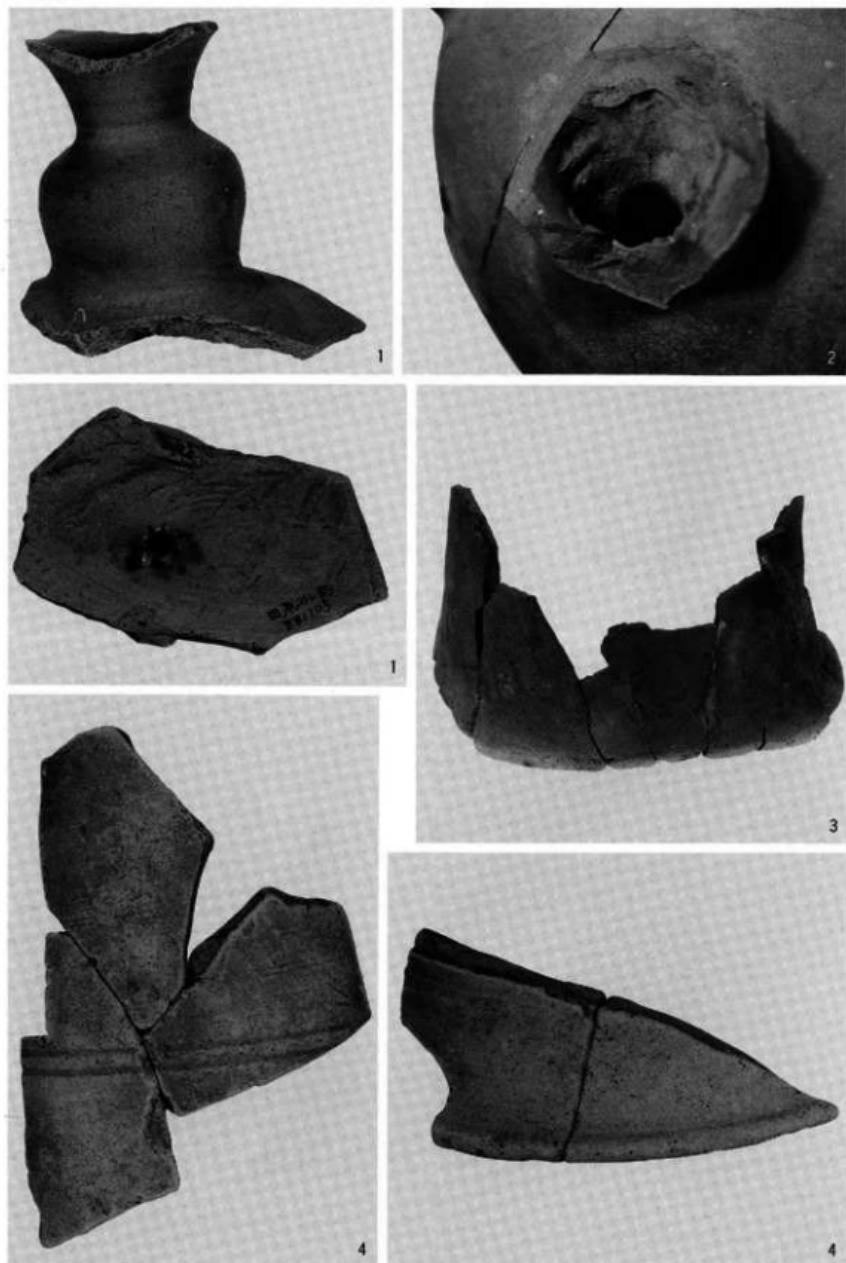


3



4

第2トレンチ出土の子持壺



第2トレンチ出土の子持壺



1



2



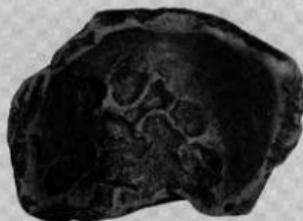
3



4



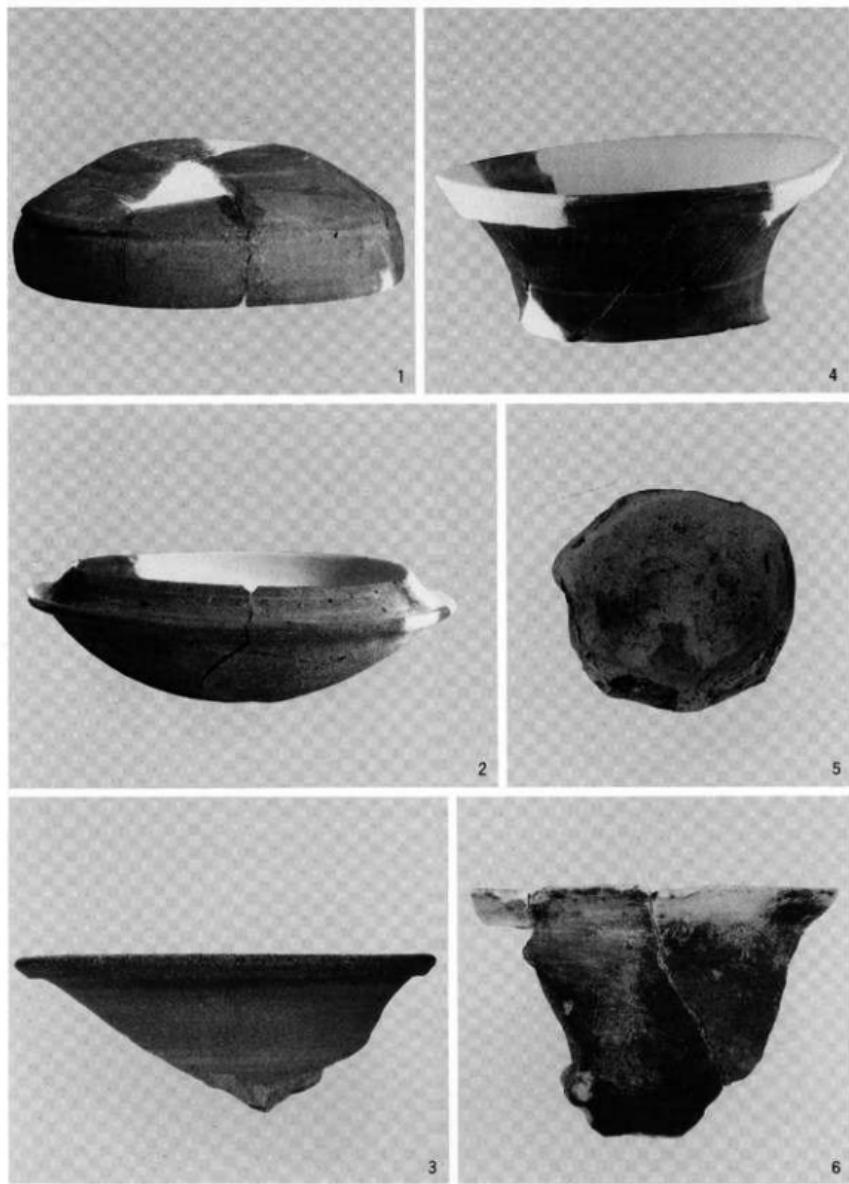
5



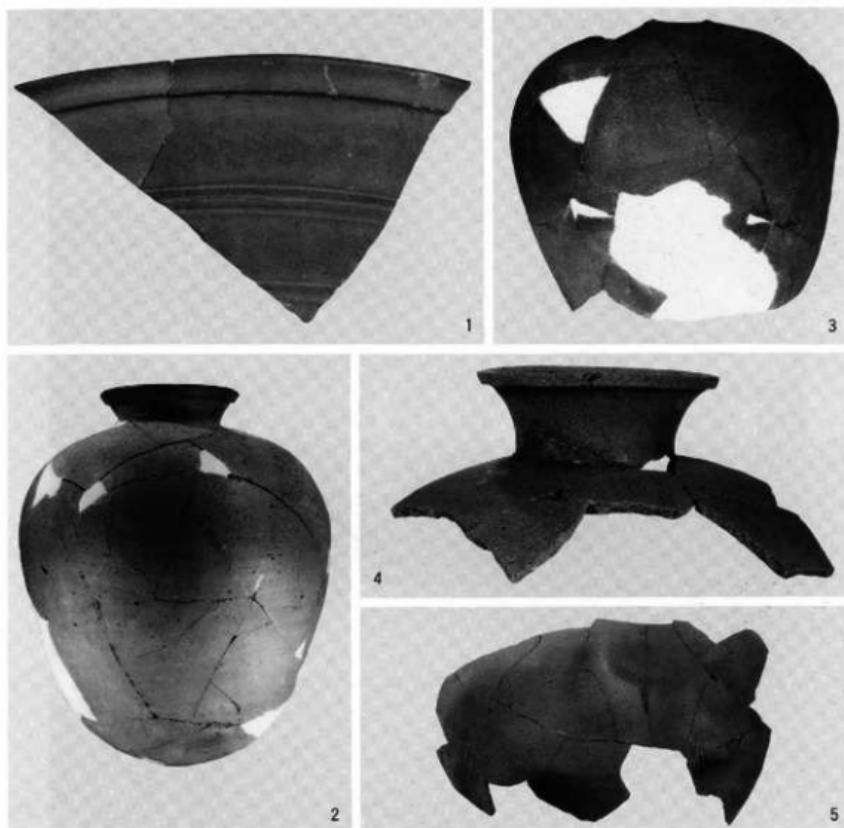
6

第2トレンチ出土の子持壺

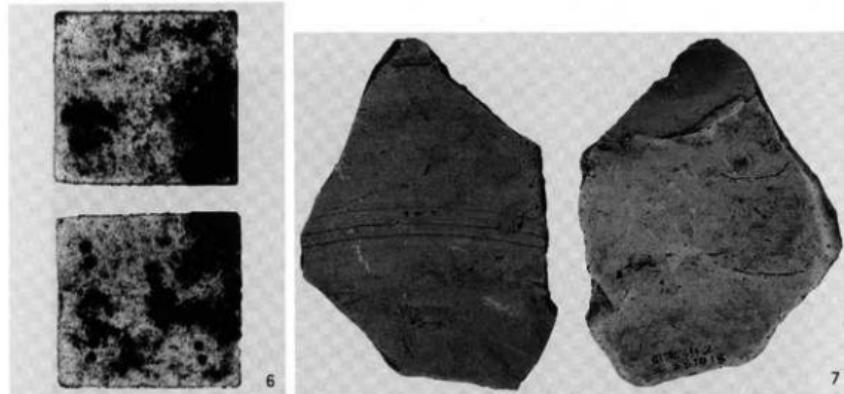
図版 8



第2トレンチ出土の土器



第2トレンチ出土の土器



第2トレンチ出土の石器

第3トレンチ出土の土器



史跡出雲國山代郷正倉跡と下黒田遺跡(○印が今回調査地点)



下黒田遺跡と今回調査地点(東から)



調査区南側遺構検出状況
(南から)



調査区北東側遺構検出状況
(南から)

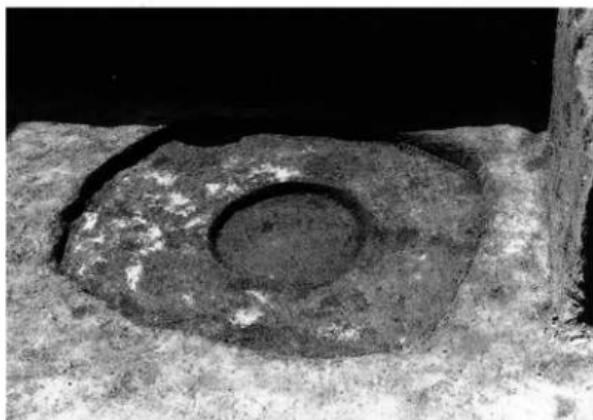


SB03検出状況(東から)

図版12



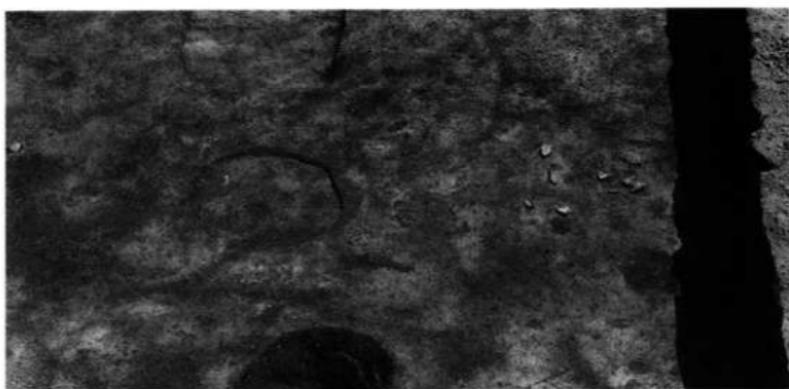
SD01と土層の状況
(南西から)



SB01検出状況



石器出土付近の土層観察 (北から)



石器出土状況(西から)



同上部分(北から)



同上部分(南から)



石器接合資料 I ~ IV



1989年3月20日 印刷
1989年3月30日 発行

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI
— 田原古墳・下黒田遺跡 —

編集・発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89番地